

ティックな変貌が読める。

あじさいの小径にまだ咲き残るつつじの紅くあきらめており  
水口奈津子

時期がすぎて、あじさいの季節になったにもかかわらず咲き残った紅いつつじ。つつじの紅さは取り残されたあきらめの紅さなのだ、そんな意味だろう。毎年、季節ごとに咲く花が、自分について思ったり考えたりすることがあるのならば、こんなことも思うのかも知れない。そんな気にさせられる。

高齢者は避難させたと誇らしく言いたる人も高齢に見ゆ  
小畠千佳

にほんでは高齢者の数が急激に増えてきたせいだろう、最近、「高齢者」という語を聞くことが多くなった気がする。そんな「高齢者」をクローズアップする時代の空気に違和感をおぼえている作者なのだろう。皮肉から批評へ。「誇らしく」が強くひびく。

円墳のめぐりは青田その畦を子らの一団並びてよぎる  
本川みや子

夏の古墳である。子供たちはそろって見学に来たのだろうか。直接、言われてはいないが、たぶん空は晴れているのだろう。広がる夏の田圃の、色彩だけではなく図形もきわめて鮮明で、読者は色もかたちも、すっきりと心に描き出すことができる。

草の根のながきふかきを取り得ざり大地から湧く命の重し  
間宮清夫

夏の雑草取りである。一連の最初に「草取りに汗たつ

ぶりのボランテア……」とあるから、自分の家の庭の草取りではないらしい。なかなか取りきれない雑草をうたつて、強靱な生命力の表現になっているところが見どころだろう。

冷感のしみ入るまひる石鎚山中宮成就社鳥居をくぐる  
山本枝里子

「冷感のしみ入るまひる……」が、七月末でも寒い石鎚山中の空気をつたえている。「石鎚山中宮成就社」は石鎚四社の一つで、役小角が石鎚山を開山し、成就社の「見返遥拝殿」のある場所だ。「吾が願ひ成就せり」と言っただけというのが、名称の由来とされているという。長い固有名詞を一首の中にうまく生かした工夫が見どころ。

夏空も抱えきれないほどの雲「陽性」通知に打ちのめされて  
星野さいくる

今月号「心の花」には、私が昨日から今日にかけて見ただけでも、新型コロナウイルスで陽性になったという歌が十首以上あった。佐佐木頼綱宅では一家四人そろって陽性になったというメールが、数日前に来た。この作、それらの代表ということで掲載させてもらった。結句がやや大げさかもしれないが、上句の比喩に注目。

願いごとあればと渡されたるペンを握り十一歳の鎮もり  
駒田晶子

十一歳の子に願いごとを書かせようとしている。そこはどこだらう。学校か。あんがい神社なのかもしれない。欲しいものならすぐ書けるのだらうが、「願い事」と言われても、とっさには難しいのかもしれない。